

---

# 脱げない制服

たまも

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
脱げない制服

【Nコード】  
N9345M

【作者名】  
たまも

【あらすじ】  
ゆかりは高校生になったが制服は気に入らず…

## 脱げない制服

ゆかりは4月から高校生

本命の公立校に行きたかったが残念ながら滑り止めの私学に入学することになった。

「あーあ かわいい制服着たかったな・・・」

ゆかりの入学する予定の高校は紺のブレザーにジャンパースカート赤のネクタイと

いまいち人気のない制服であった。

「あつちの高校はかわいいセーラー服だったのに・・・」

そして入学式の朝

吊るしてある新品の制服に初めて袖を通す時がやってきた

「やつぱり ダサイこんなの着たくない」

そうはいっても着るしかないのだが・・・

最初はカッターシャツを着た

ゆかりは中学の頃はセーラー服だったので白のカッターシャツを着るのは

初めての経験だった

「第一ボタンはとめたほうがいいのかな・・・」

そういえば制服の着方というプリントをもらっていたな・・・  
最初の内はそれでいっておくか

プリントには

シャツのボタンはすべてとめること（第一ボタン カフスボタンも必ず）

ネクタイは必ずする事

ブレザーのボタンはとめる事  
と書いてある

ゆかりは第一ボタンをとめた

「うつつ 結構苦しい！」

さらにゆかりの首に合わせて採寸されゴムを調節されたネクタイがゆかりの首を締め付けた

ネクタイはゴムと金具でとめるワンタッチ式のものであったがゴムは伸ばせないようになっていて ゆかりの首元にしっかりと食い込んだ

「苦しい 我慢できない」

しかし入学式早々校則を破るわけにもいかないのです

ゆかりは苦しいながらもジャンパースカートとブレザーを着て部屋を出た

「お母さん 首元苦しいんだけど」

「もう少し緩めてみたら」

母親はそういったが

ネクタイのゴムは今より伸ばせないようになっている

「無理みたい 目一杯伸ばしてこれだもの」

「我慢しなさい すぐ慣れるし よく似合っているわよ  
だらしないよりきちんと締めたほうがかわいいわよ」

「もう ひとつとだと思って 行ってきます」

ゆかりは家を出た

入学式も無事終わり

ゆかりは家に帰ってきた

「あー苦しかった 早く制服脱ごつと」

ゆかりはブレザーの前ボタンをはずそうとしたが なぜかはずれないあれ布に引っかけたかな

しょうがないのでネクタイを先にはずそうとしたが金具がはずれない

「なんで・・・」

「お母さん 制服脱がして」

いない さっきまでいたのに

しょうがないゆかりはベットに横になった

そのうちお母さんも帰ってくるだろう

そのうちゆかりは眠りについた・・・

ゆかりは目覚めた

あれ　ここは・・・

教室

「ようこそ　南井ゆかりさん」

後ろで女の声が聞こえた

「誰！」

「私はあなたの担任の丸山です」

そこには40歳前後の女性が立っていた

「これから三年間毎日この学校で制服に懺悔してもらいます

もちろん家には帰れません」

なにをいつているのか　ゆかりは訳がわからなかった

とりあえずここから逃げ出そう

ゆかりは怖くなって一目散に校門に向かって走り出した

門まであと少しの所で　制服がゆかりの体を強烈に締め付けた

「きゃあああ！！！」

首　手首　腰　制服が強烈に締め付ける

ゆかりは痛さと苦しさでのたうちまわった

「その　制服を着ている限りこの学校からは出られませんよ」

丸山がそういった

しばらくすると締め付けもなくなり　ゆかりは息を切らしながら

ゆっくり立ち上がった

「ここは　どこなんですか？」

「家にかえりたい・・・」

ゆかりは泣きそうな声で丸山に尋ねた

「君が制服を着たくないと言ったから　制服が怒って異世界に連れ

込んだんです

その制服は君に着てもらえるのを楽しみにしていたのに・・・」

そんな・・・

「この学校からは出られません 制服を脱ぐ事ができれば別ですが 着ている本人では絶対脱ぐ事は出来ません」

ゆかりは必死でブレザーのボタンをはずそうとした

どうしてもはずれないので力任せに引きちぎろうとしたり

カッターシャツの襟と首の間に指をいれて第一ボタンを引きちぎろうと

したがまったく無駄だった ネクタイもきっちりゆかりの首周りに食い込んではずすことは

どうしても出来なかった

「今日の授業はもう終わりです」

「部屋に案内します」

ゆかりはあきらめて丸山の後ろについて行った

制服の締め付けの苦しさは二度と味わいたくなかったので

ゆかりは逃げる気力も失っていた

学校はゆかりが通う予定だった高校そのものだったが 人の気配はなかった

「あその他に人はいないんですか？」

ゆかりは尋ねたが丸山は無言でゆかりの少し前を歩いている

「ここです」

丸山が立ち止まった先に廊下の壁にぽつんと鉄のドアがあり小さなのぞき窓がついていた

「入りなさい」

ドアを開けて丸山がゆかりを部屋に押し込んだ

「明日の起床は6時です 早く寝なさい」

丸山はそう言くと部屋から出て行った

ゆかりはドアを開けようとしたが鍵が掛かっいて開ける事は出来なかった

部屋は6畳ぐらいでトイレも付いていた ベットと机 洗面台 照

明もあつたが

部屋には窓はなかった

部屋から出られないゆかりは机の椅子に座った

普通の学習机だが新品なのか非常に綺麗だった

机の引き出しを開けてみると小箱がありその中に文房具とはさみを  
見つけた

しばらくしてゆかりはベットに腰を掛けた

フカフカで寝心地は良さそうだ

横になってみよう

ゆかりは黒の革靴を脱ごうとしたが脱げなかった

「靴すらも脱げないの・・・」

ゆかりはこれからどうしていいかわからないのでとりあえずそのま  
まベットに横になった

「これからどうなるんだろう」

ゆかりは不安でしかたなかったが疲れていたのか少し眠気がやって  
きた

電気を試しに消灯してみたがドアの小窓からは向こうが暗いのか

こちらからは見えないようになっていいるのか

まったく暗闇でなにも見えなかった。

ゆかりは電気を点灯した　あまりの暗闇で恐怖だったのだ

このまま明るくしたまま寝よう

ゆかりは横になり目を閉じた

30分ほど目を閉じていただろうか

制服のまましかも靴も履いたままでは非常に寝苦しかった

なかでもネクタイは非常に苦しかった

せめて少しでも緩められてカッターシャツの第一ボタンをはずす事  
ができれば

だいぶん楽だろうがきちんと採寸されたシャツとゆかりの首周りより  
少し小さめで調整されているゴムと金具でとめるネクタイはゆかり

の首を

きっちり締め付けている

「寝苦しい」

ゆかりはふと先ほど机にはさみが置いてあったのを思い出した  
あのはさみでボタンの糸やネクタイのゴムを切れないかしら

ゆかりははさみを手に取りネクタイのゴムを切ろうとした

その瞬間また制服がゆかりの体を締め付けた

「ぎゃあああ!!」

制服が急激に小さくなっていくような締め付けだ

ゆかりは激痛で気絶してしまった。

「起きなさい」

その声でゆかりが気が付くとそこには丸山が立っていた

気絶してそのまま床で眠ってしまったのか気絶したままだったのか  
わからないが目覚めは悪くはなかった

「もう6時です。早く起きて準備しなさい」

「顔を洗い髪をなおしなさい お化粧は禁止です」

ゆかりは洗面所で髪をとかした 髪は少し乱れていて埃っぽい

そういえばお風呂にも入ってないな

制服を着たままでは入れないけど…

制服はゆかりが床で倒れていたにもかかわらず制服のプリーツなど  
もしわにもならず真新しいままである。

顔を洗っている時に袖に少し水がかかったゆかりは試しに制服に水  
を手でかけてみたが水玉になり弾いて濡れる事はなかった

多分 汚れたりもする事はないのだろう

「用意出来ましたか？」

「あなたの専属のメイドを紹介します」

丸山が言った



メイド…！？

「入りなさい」

丸山の後ろにゆかりと年は同じぐらいだろうか…  
可愛いメイド服を着た女の子が立っていた

## 走る

この子はあなたの世話をするかりんちゃんです

「さあ挨拶をしなさい」丸山が言った

「はじめましてお嬢様これからゆかり様のお世話をさせていただきます」

ゆかりは戸惑ったが

「よろしくね」

としか言えなかったが実際は同学年の子と会えて嬉しかった

「それでは朝食の準備をしてまいります」

かりんはそう言って立ち去った

「さああなたは制服に謝ってもらいます」

「とりあえず今日は校庭を走ってもらいます」

「走るのと制服に謝るのと何が関係あるのだろうか・・・」

ゆかりはそう思ったが言われたままに校庭を走り出した

ゆかりは持久力には自信があった 中学時代陸上部で長距離を走っていたからだ

走り出してしばらくして汗でシャツが濡れないことに気が付いた  
多分 特殊な素材であろうシャツに吸われているのか

シャツの中が汗で濡れるということとはなかった

しかし顔からは汗が噴出してくる

4月とはいえネクタイやジャンパー スカート 上着を着ながら

走るのは勝手が違った 体温を逃がす事ができない制服

「暑い 暑い」

ゆかりは首とカッターシャツの襟の間に指をいれて体温を逃がそうとしたが

襟がゆかりの首に張り付いているかのように指を入れる事は出来なかった

ブレザーの胸元を掴んでパタパタしてみたがまったく無駄だった

膝丈ぐらいのスカートも捲り上げようとしても上げることが出来ない・・・  
暑さと苦しさでゆかりはその場にしゃがみ込んだ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9345m/>

---

脱げない制服

2010年10月10日02時23分発行